

## 『洛陽名所集』 卷6 「宇治」 に出る中国関連記事について

小松 謙  
林 香奈

### ・茶は南方の嘉木

茶の聖典とされる陸羽（733～804）『茶経』冒頭の句。

### ・神農の食経

以下唐代中期までの記述は、陸羽『茶経』「七之事」に基づく。

「神農」は、伝説上の王者である三皇の一人とされる炎帝神農氏。さまざまな草を試して、薬を創造したとされる。『神農食経』という書名は『茶経』以外には見えないが（『太平御覧』などに見えるのはいずれも『茶経』からの引用である）、魏晉南北朝期に『神農本草』という書物が出現し、梁の陶弘景（456～536）がこれを整理して『神農本草経』を編集した。陸羽が指すのはこれらの書物かと思われる。

### ・後魏の琅琊王肅

王肅（465～501）は北魏の人。字は恭懿。もとは南朝随一の名門琅琊の王氏に属し、南齊に仕えていたが、次項に見える武帝に一族が殺されたため、北朝に亡命し、北魏の孝文帝の信任を受けて、北魏の軍を率いて南齊に侵入を繰り返す。尚書令に至った。『魏書』巻五十一に伝がある。お茶に関しては、東魏の楊銜之の『洛陽伽藍記』巻三に次の故事が見える。王肅が北魏にきた当初は北方の羊肉や酪（ヨーグルト）に慣れず、鮒のスープやお茶ばかりを好んでいたが、後に孝文帝が宴を催した折には羊肉とヨーグルトを大いに食べた。孝文帝が南北の飲食物の優劣を問うと、「それぞれ好みはあるものの、羊肉は大国、魚は小国のようなもので、魚は羊肉に及ぶべくもありませんが、お茶（原文は「茗」）は酪の奴となるべきものではありません」と答えた。これを聞いた孝文帝の弟の彭城王が王肅を招待して、「小国の食べ物と酪奴を用意しよう」と言ったことから、お茶の異名を「酪奴」と呼ぶようになった。

### ・齊の世祖武帝

南朝南齊の第二代皇帝蕭曠（440～493、在位482～493）。『南齊書』巻三に、死に当たって残した遺詔に、「私の霊前には、決していけにえを供えてはならない。供えるのは餅（小麦粉を焼いたもの）・茶飲・干飯・酒脯（酒と干し肉）のみとせよ。貴賤を問わず、天下皆この制に従え」とある。

### ・韋曜孫皓

韋曜は韋昭（204～273）のこと。「韋曜」とするのは、史書『三国志』において、晋の文帝司馬昭の諱を避けて「韋曜」としているため。字は弘嗣。三国呉の学者。『国語』の注などで知られる。剛直であったため、孫皓に憎まれて殺された。孫皓は呉の最後の君主（242～284、在位264～280）。『三国志』巻六十五「韋曜伝」に、孫皓は臣下に酒を七升（当時の一升は約0.2リットル）飲むことを強要したが、韋昭を当初は重んじていたため、二升しか飲めない韋昭のために量を減らしてやり、時には「密かに茶菴を賜りて以て酒に当て」たが、後にはこれも許されなくなったとある。

### ・劉琨

劉琨（270～318）は西晋の武将・詩人。字は越石。西晋の崩壊後も北方にあって、晋復興を目指して孤軍奮闘を続けたが、同盟者に裏切られて殺された。『太平御覧』巻八百六十七に引く彼が兄の子南安州刺史劉演に送った手紙に、「以前に安州の乾茶二斤、薑（しょうが）一斤、桂（肉桂）一斤を送ってもらいましたが、どれも必要なものです。体の中がくさくさして、いつも「真茶」を求めていますので、ぜひ送ってください」と見える。『茶経』にも同文が見えるが、その中では劉演に真茶を常備するように勧めている。

### ・弘景

南朝梁の陶弘景（456～536）のこと。字は通明。山中に隠遁して神仙の道を求め、道教の経典となる『真誥』を著し、また『神農本草経集注』をまとめて、後の本草学の基礎を築いた。梁の武帝に信任されて政治の諮問をも受け、「山中宰相」と呼ばれた。前述の通り、『神農本草経』にも茶に関する記述はあったものと思われるが（原型は失われているため、正確なところは不明）、ここで陶弘景の名があがるのは、『茶経』が彼の『雑録』という今では失われた書物の「苦茶は身を軽くし、骨を換える」という記述を引くことによるものであろう。

#### ・陸羽

陸羽（733？～803）は唐の人、字は鴻漸。茶の聖典とされる『茶経』の著者。捨て子であったとも孤児であったともいい、寺で育てられ、役者になったが、地方官に認められて教育を受け、後には顔真卿ら名士と交わった。

#### ・盧仝

盧仝（？～835）は中唐の詩人。玉川子と号した。韓愈らと交わり、奇怪な詩風で知られた。宦官一掃のクーデターが失敗して発生した甘露の変に巻き込まれ、頭に釘を打ち込まれて死んだ。新茶を届けた友人の孟諫議に礼を述べた彼の「走筆謝孟諫議寄新茶（筆を走らせて孟諫議の新茶を寄するに謝す）」は、茶を飲んで陶醉するに至る過程を詠んだ詩として後世に大きな影響を与え、陸羽と並称されるに至った。

#### ・皮日休が茶中雜詠序

皮日休（834？～902？）は晩唐の詩人。字は襲美、鹿門子と号した。咸通八年（867）に科挙に合格して進士となったが、後に黄巢の反乱軍に加わって重用された。最期については、黄巢に殺されたとも、唐の軍に殺されたともいう。彼の「茶中雜詠」は、「茶塢（茶の生育地）」「茶人（茶摘み）」「茶筍（茶の芽）」「茶罏（茶摘みの籠）」「茶舎（製茶の小屋）」「茶竈（茶を蒸すかまど）」「茶焙（茶をあぶる炉）」「茶鼎（湯を沸かす釜）」「茶甌（茶碗）」「煮茶」という十篇の七言律詩からなる連作で、彼と並称された詩人陸龜蒙と唱和したものである。この詩には序があり、そこには陸羽の『茶経』を読んで大いに感銘を受けたが、陸羽はまだ詩の形で述べてはいないので、この作品を作って陸龜蒙に贈るとある。

#### ・劉禹錫が試茶歌

劉禹錫は中唐の詩人（772～842）。柳宗元らとともに政治改革を敢行しようとして失脚、事実上の配流の後、政界に復帰したが、不屈の精神を失わず、地方官を転々とし、晩年は洛陽で閑職にあつて白居易と唱和して過ごした。韓愈・白居易・柳宗元と並んで中唐を代表する詩人に数えられる。「試茶歌」とは、「西山蘭若試茶歌」のこと。寺院でお茶を飲むことを具体的に記述しており、当時のお茶の飲み方を知る上でも有用な資料である。

#### ・張又新が煎茶水記

張又新は唐の人、字は孔昭。元和九年（814）の科挙に首席合格したが、悪評高い宰相李逢吉の手先となり、汚名を残した。『煎茶水記』は、『茶経』を踏まえた著作で、原名は『水経』だったが、『水経注』で知られる地理書と混同しやすいため、『煎茶水記』と改めた。茶に用いる水について、陸羽の説として二十の等級に分けて論じる。

#### ・歐陽修が大明水記

歐陽修（1007～1072）、字は永叔、唐宋八大家の一人に数えられる北宋を代表する大文人であり、政治家としても知られる。「大明水記」は、張又新の『煎茶水記』について、陸羽の説とは矛盾するとして批判しつつ、揚州大明寺の井戸の水については、『煎茶水記』に第十二としてあげられるものではあるが、たいへんすぐれていると述べたものである。『古今事文類聚』続集卷十二「茶」の項に引かれており、以下同書に見える文が多くこの記事に含まれている点から考えて、この記事の原拠の一つかと思われる。

#### ・徐巖泉が六安州茶居士傳

徐巖泉に該当する人物としては、明代後期の徐爌（1515～1586）がおり、確証はないがこの人物かと思われる。「六安州茶居士傳」は、茶を擬人化して、茶という姓の人物の体裁を取った遊戯的文章である。この文は清の陸廷燦の『続茶経』以外にはほとんど見られないが、『続茶経』は『洛陽名所集』より後の書であり、この箇所原拠になったとは考えられない。あるいは両書が同じ原拠に基づいているものか。

#### ・王禹偁が茶井詩

王禹偁（954～1001）は北宋の文学者。字は元之。太平興国八年（983）の進士。剛直をもって知られ、三度にわたって左遷されて地方官として終わった。当時流行していた晩唐五代以来の繊細な詩文を否定し、古文を主張するとともに、詩においても宋代の詩風の基礎を築いたことで知られる。彼に茶の詩は多いが、その詩文集には「茶井」という詩は見あたらない。但し『古今事文類聚』卷十二「茶」には王元之「陸羽茶井」という律詩が見え、王の集（『小畜集』卷七）ではそれを「陸羽泉茶」と題する。あるいは『続茶経』に「茶園詩」として引く作品を指す可能性もあろう。『続茶経』には四句を引くだけであるが、もとは「茶園十二韻」と題する二十四句からなる長篇の五言排律であり、「在揚州」

と題する点から考えて、揚州の茶園で作ったものと思われる。茶の栽培から茶摘み、宮廷に献上されるまでを叙述して、諷諫の意をひそませたものである。

#### ・李南星羅大経が茶瓶湯候詩

李南星は李南金、湯候は湯候の誤り。南宋の羅大経の『鶴林玉露』巻三に見える記事による。そこでは、茶を淹れる湯の沸かし方について、まず李南金が陸羽の当時とは方法が変わっているとして、湯の沸き具合を知る新しい判断の方法を七言絶句の形で述べ、それに対して羅大経が沸いたところですぐ淹れるより少しおいた方がよいとして、やはり七言絶句で自分の意見を述べるという形を取っている。「湯候」は湯の沸き加減を観察すること。

#### ・蔡君謨が壠採造試四首の茶詩

蔡君謨は北宋の政治家・書家蔡襄(1012～1067)のこと。君謨は字。天聖八年(1030)進士となり、財政を統括する三司使にまで上った。書においては、蘇軾・黄庭堅・米芾と並んで宋の四大家に数えられる。彼は福建の財政を統括する福建路転運使であった時、福建建安の北苑にあった皇室用茶園で採れた茶葉を丸い龍の模様のついた型に入れて固めた「小龍團」を献上して時の皇帝仁宗に気に入られ、後に仁宗の諮問に答えて、茶論『茶録』を著した。ここでいう茶詩とは、彼が北苑で作った連作「北苑十詠」のことである。この十首の中に、「茶壘」(茶の木)・「採茶」(茶摘み)・「造茶」(型にはめて小龍團を造ること)・「試茶」(試飲)がある。やはり『古今事文類聚』に見える。

#### ・呉淑が茶賦

呉淑(947～1002)は北宋の文人。字は正儀。初め南唐に仕え、南唐の滅亡後は宋に仕えて『太平御覽』『太平広記』などの編纂に参加した。天・地以下さまざまなテーマを詠物的に詠んだ賦百首からなる『事類賦』三十巻を著し、このジャンルの創始者となった。「茶賦」はその一篇である。

#### ・范希文の鬪茶歌

范希文は北宋の政治家として名高い范仲淹(989～1052)のこと。希文は字。大中祥符二年(1015)の進士。政治家として多くの業績をあげ、参知政事(副宰相)にまで上った。文章家としてもすぐれ、「岳陽楼記」は「天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」の名句で知られる。「鬪茶歌」は、正確には「章岷従事に和する鬪茶の歌」と題し、建溪(福建省閩江上流)における茶の生育や茶摘みからはじめて、北苑から皇帝に茶を献上することを述べ、ついで「鬪茶」について叙述する。そこでは「鬪茶味」「鬪茶香」して「品第」するとあり、どうやら味と香を競ってランクづけするようである。この詩も『古今事文類聚』に見える。

#### ・唐子西が同じく説

唐子西は北宋の詩人唐庚(1071～1121)のこと。子西は字。進士となったが、政争に巻き込まれて失意の生涯を送った。「鬪茶説」は正確には「鬪茶記」だが、『古今事文類聚』ではその一部を「鬪茶説」として引いており、この記述は同書に基づいているのかもしれない。その内容は、政和二年(1112)に二、三人の友人と「鬪茶」をして、「第其品」、つまりランク付けをしたということから議論を展開していくもので、「鬪茶」の内容は范仲淹のものと同じようである。

#### ・蘇子瞻が煎茶歌

蘇子瞻は北宋を代表する大知識人として名高い蘇軾(1036～1101)のこと。子瞻は字、東坡居士と号した。宋代最大の詩人にして、唐宋八大家の一人に数えられる文章家であり、書画にもすぐれ、哲学にも著作があり、政治家としても旧法党の重要人物の一人であった。「煎茶歌」とは、正確には「試院煎茶」という詩で、杭州において科挙の地方試験試験官となった時にお茶をいれたことを非常に具体的にうたっている。この詩を「煎茶歌」と題するのはやはり『古今事文類聚』であり、同書に基づいている可能性があるものと思われる。

#### ・黄魯直が同じく賦

黄魯直は北宋の詩人黄庭堅(1045～1105)のこと。魯直は字、山谷道人と号した。蘇軾の弟子で、詩人としては師と肩を並べる名声を持ち、南宋において絶大なる影響力を持った江西詩派は、黄庭堅を祖として尊崇した。日本の五山文学にも大きな影響を与えた。また、書家としても名高い。「煎茶賦」は、賦の形でお茶の効能と飲み方を述べ

たもの。やはり『古今事文類聚』に収められている。

#### ・ 劍南の蒙頂石花……

以下「碧澗明月」までは、『古今事文類聚』に『国史補』に基づくとして引かれており、『唐国史補』には確かに同じ記事が見えるが、ここでの引用の形は大幅な省略を加えた『古今事文類聚』と合致している。

「劍南蒙頂石花」は四川省蒙山の頂で採れる茶。白居易は「新昌の新居に事を書す四十韻、因りて元郎中・張博士に寄す」および「琴茶」詩でこの茶に言及している。「湖州顧渚紫筍」は浙江省顧渚山周辺で採れる茶。同じく白居易の「夜 賈常州・崔湖州の茶山の境会を聞き、歓宴を想羨し、因りて此の詩を寄す」詩に「紫筍」の語が見える。「峽州碧澗明月」は湖北省宜昌で採れる茶。「霍山」は壽州（安徽省霍山県一帯）の「霍山黄芽」。『太平御覧』巻八百六十七に引く『唐史』にその名がみえる。「鳳山」は福建建安の東にある鳳凰山周辺を指す。『続茶経』に引く宋の無名氏による『北苑別録』に「建安の東三十里に鳳凰山がある」とあり、この一帯で採れた茶を北苑茶とも称した。『古今事文類聚』別集巻十四に引く『苕溪詩話』には、北苑で採れた茶を鳳山と名づけたとある。蔡襄の『茶録』でも鳳凰山で産出される茶の味が素晴らしいことを述べている。

#### ・ 黔中恩播夷費……

以下「象」までは『茶経』「八茶之出」に列挙される茶の産地の最後の部分をほぼそのまま用いたものである。

#### ・ 雪映雲脚細珠素濤

いずれも淹れた茶の様子や味わいを形容した語か。「雪映」は未詳。白い茶の色や濃厚な味わいをいう「雲映」という語があり、その意に近い。蔡襄の「孫之翰の茶を寄するに謝すに和す」詩に「雲映」の語を用いている。「雲脚」は茶を点てた時、湯水の中に茶の粉が雲が垂れ込めるように拡散する様子。蔡襄の『茶録』点茶の条に「茶が少なく湯が多ければ、雲脚が散じ、湯が少なく茶が多ければ、粥面（粥のように茶の粉が表面で膜をはる様子）が聚まるとあり、原注に「建人がこれを雲脚・粥面といった」とある。「細珠」は湯の沸き具合をいうか。陸羽の『茶経』に「魚の目のような泡がたち、微かな音をたてるのが一沸、泉が湧くように珠を連ねたような泡をたてるのが二沸、波打つように煮えかえるのが三沸」とある。それを踏まえた蘇軾の「試院煎茶」詩（「煎茶歌」）に「細珠」の語が「蟹眼」「魚眼」「松風（湯の沸く音）」とともにみえる。「素濤」は茶を白い波に喩えた謂。宋の陳鵬『耆舊續聞』巻八に、范仲淹が茶を「黄金の碾畔 緑塵飛び、碧玉の甌中 翠濤起る」と詠んだのに対し、蔡襄が絶品のお茶は色が白く、緑色のものは劣るので、先の詩の句も「緑塵飛び」を「玉塵飛び」に、「翠濤起る」を「素濤起る」とするのはどうかと提案したところ、范仲淹もそれに応じたとある。

#### ・ 唐徳宗……

このことも『古今事文類聚』に見える。唐の徳宗の建中三年(782)に茶への課税が開始され、その後一度廃止されたが、貞元九年(793)から課税が再開され、以後は税率が引き上げられる一方であった。